親子と血縁
――人びとの血縁意識とは――

久保原　大（東京都立大学）

1. はじめに

これまで親子関係における血縁は，ある意味当たり前のものであり，血縁がある／ないという二項対立として述べられることが多かった．そして，血縁意識といった場合には，「血縁にこだわる＝血縁意識が強い」「血縁にこだわらない＝血縁意識が弱い」というように親子関係における血縁規範に対する意識の強弱として述べられることが多い．しかし，それでは人びとが血縁に対してどのような意識を持っているかを捉えることはできない．第29回大会報告では，血縁意識を「親子関係に『血縁がある／ない』ということがもたらす効果にどのような意味づけをするかによってもたらされるもの」と定義し，非血縁パートナーからの虐待などの事例から，人びとの血縁意識を捉えることの重要性を提示した．けれども，これまで人びとの血縁意識がどのようなものであるかが問われたことはない．

そこで本報告では，人びとの血縁意識がどのようなものであるかを明らかにすることを目的とする．

2. データと方法

本研究は，2020年1月に民間調査機関により行ったインターネット調査をもとに分析を行う．対象者は1,000名（男女各500名）．年齢16歳から69歳．サンプルの抽出方法は，調査機関が保有するアンケート会員（約1,800万人）にランダム配信し，スクリーニングを回答した方の中から対象条件に合う人が本調査に進むような仕組みで行っている．ステップファミリーを除く1,200名程度の回答から不正回答を排除し，各属性の数がほぼ同数となるよう1,000名を抽出している．調査結果の属性クロス集計と設問間クロス集計による分析から，人びとの血縁意識がどのようなものであるかを検討する．

3. 結果と考察

「親子である」ことにとって「血のつながりがある」ことはどのくらい重要だと思いますか，という設問に「非常に重要である」23.6%，「ある程度重要である」41.4%，「あまり重要ではない」26.8%，「まったく重要ではない」8.1%という回答結果であり，親子関係における血縁規範意識が強い傾向がみられる．ただし，「ある程度重要である」と「あまり重要でない」の境界は曖昧であるため解釈には注意が必要である．そして，ジェンダー差や年代差もみられ，特に男性は年齢が上がるほど「非常に重要である」を選択する傾向（60代41%）がみられる．また，これまで「親子の血縁（血のつながり）」について何か考えたことはありますか，という設問には「ある」28.5%，「ない」71.5%という回答結果であった．これは，多くの人が自身の血縁意識を問うような状況に遭遇しておらず，血縁意識が潜在化されているためであると考えられる．そのため，多くの人が自身の血縁意識を自覚しておらず，実際に第三者がかかわる生殖補助医療やステップファミリーなどの非血縁親子関係が形成されることに直面したときに，自身の血縁意識が顕在化され，それが親子関係における様ざまな問題の要因となることがあるのではないだろうか．

付記

本報告は，令和2年度科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）「親子関係に血縁がある／ないことがもたらす効果に対する人びとの意識について」（課題番号：20K22147，研究代表者：久保原大）の研究成果の一部である．

（キーワード：親子、血縁意識、血縁／非血縁）